

大学から少し歩いたところにある、落ち着いた雰囲気
の喫茶店の前。僕はそこで、同じ講義をいくつか
取っている旭と待ち合わせていた。待ち合わせ場
所に行くと、背が高く、少し明るい髪色の旭はす
ぐに見つかった。そして僕が見つけたのとはほぼ同
時に、旭も僕に気づいた。整った無感情な顔が、僕
を見た途端に笑顔になって手を振ってくる。それ
に合わせ、僕も手を振った。

「授業お疲れ！じゃ早速中入ろうぜ。チラッと見た
けど今日からいかん限定メニューあるって」

「へー、どういうの？」

「キャラメルをやつだって」

「美味しそうだね」

喫茶店の中に入り、席の向かい側に座った旭は、
相変わらず話が上手くてすぐに他愛のない話で場を
盛り上げてくれる。彼との会話は面白くて、僕は
いつの間にかリラックスしていた。

今日も注文したコーヒーを一口飲みつつ、大学の

課題を進めていたが、しばらくたって旭がいたずらっぽく目を細めて身を乗り出してきた。

「ねー和希。ちょっと面白そうな『実験』あるんだけど、付き合ってくんない？」

「実験……？」

「そうそう。実は最近、面白いアプリ見つけてさー。催眠アプリなんだけど、本当に使えるか試してみたいんだよねー」

唐突な言葉に僕は驚いた。

「催眠？ なにそれ？ 旭、そんなことまで興味あるの？」

「いや、マジで信じてるわけじゃないけどさ！ けど和希なら素直そうだし、なんかかかりそうじゃん」

「ええ……」

「どうせネタだと思うけど、ちょっと面白いじゃん？ けど催眠アプリは2人じゃないと試せないからさー。な、ちょっとだけどう？」

「……まあ、旭が言うなら、別にいいけど……。確かにちょっと面白そうではあるかな」

深く考えずにそう頷くと、旭は満足そうに微笑んだ。なんだかその笑みが若干いつもと違うように見えたけれど、その違和感はすぐに流れた。

「あ、けど一つだけアプリに書いてあるルールね！催眠ってさ、一回入り込むと途中で止めるのがムズいんだって。だから、最後まで俺のペースでやらせてくれる？」

「うん。わかった」

「ありがと！じゃ、リラックスして。椅子の背もたれに体預けてさ……ゆっくり、目閉じてみて？」

「え、ここでやるの？」

「大丈夫だって！誰も俺らのことなんて気にしてないからさ！」

旭の自信たっぷりの言葉に背中を押されるようにして、僕はそっと瞼を閉じた。

「いいよ、そのまま俺の声だけ聞いて。外の音とかはさ、遠くで流れてるBGMかなんかだと思って聞き流しちゃって」

不思議な感覚だった。視界を閉ざすと、旭の明るい声だけが耳の奥にダイレクトに響いてくる。

「そうそう、上手じゃん。……じゃあさ、俺の言うこと、全部聞いてくれる？」

「うん……」

意識がとろとろと、柔らかに解けていく。

「和希は今から、俺の言葉にだけ応えるようになるよ。否定しないで、全部『うん』って受け入れて。ほら、深く呼吸しょ？ 吸ってー……吐いてー……」

意外と様になっている。というか、本当に催眠術があるなら、こんな感じなのかもしれない……。

「いい子だね、和希。そのまま……」

パチンと旭が軽やかに指を鳴らした。

「……さてと！今の音でスイッチ入れたよ。もう、俺の言うこと聞けるっしょ？」

「うん」

(……え？)

自分の返事に、一步遅れて戸惑いが生まれた。意識ははっきりしているのに、喉が勝手に動いて、迷いなく肯定の返事を口にしていた。自分の声が、自分のものではないみたいだ。思考と体がバラバラに切り離されていくような、奇妙な浮遊感だった。

「よし、いい感じ！じゃあここ出ようか。立って、俺についてきてね」

「うん」

(待って、旭？どこに行くの……？足が勝手に動いちゃう……)

店を出て連れて行かれたのは、夕暮れ時の静かな公園だった。人影は全くなく、遊具だけが寂しく並んでいる。

ここは時折2人で来たこともある。けれど昼間いだ。こんな時間に公園に来てなんの用事だろうか。疑問に思うものの、旭はなにも話さずに、薄暗い公衆トイレの方へと僕を導いた。

「中入ろっか。ホントはさ、部屋とかでじっくりしたいけど、いつ解けるかわかんないし……だからここでするわ」

「うん」

そう言われ、ひんやりとした男子トイレの個室に連れ込まれた。

(なんでこんなところに……)

混乱する僕の手首を、旭が優しく、でも拒む隙を与えない力強さで掴んだ。

「大丈夫、大丈夫」

と、いつもの明るい口調で耳元に囁きながら、彼は僕を狭い個室の奥へと追い込んでいく。背後に回り込んだ旭の手が、僕のズボンのベルトに触れた。

（ちょっと、旭……なにして……っ！）

「じゃ、ちょっと脱がすからねー」

「うん」

（……っ、なにそれ。嫌だ、逃げなきゃ……なのに、身体が動かない……！）

焦る気持ちとは裏腹に、体は旭のなすがままだ。ズボンと下着が一緒に膝まで引き下ろされ、露出した下半身が冷たい空気に晒される。

カントボーイの僕には、男性器がなくて、それがコンプレックスだった。そのことは大学で旭だけに話していて、友達と旅行に行ったときもさりげなく助けてくれたりしていた。僕の身体を面白がるような素振りは一切なかった。それなのに、突然どうし

てこんなことを？

「ひゃうっ！？……あ、んっ♡」

「大丈夫だって。リラックスしなよ」

旭の囁きが甘く響く。

抵抗一つできず、無防備になった僕の「そこ」に、旭の指先がツン、と触れた瞬間、考えていたことが吹き飛んでしまう。

温かな指先が、普通の男には無いはずの小さな突起をちょんちょん♡と突き上げる。

「んっ……♡ んんっ……！♡ あ……っ♡」

（やだ、そこ……一番ダメなところなのに……っ！）

旭は「おー、いい反応じゃん！」と感心したように頷きながら、僕のコンプレックスであるを、クリトリスを逃がさないように捏ね回してきた。

コリ♡ コリッ♡ ヌチュ♡ と卑猥な音が狭い個室に響く。